

FREE PAPER

大人の勉強会

「身近にある思い出の場所を大切にしたい」ということは、誰しも思うのですがその際、新しく出来た場所や、これまで行ったことのない場所への好奇心が先になり、いつもの場所を、またいつでも行けるからという理由をつけてしまいます。では、その昔からの場を見直してみよう—ということで、この勉強会を開催しました。

文化庁
令和3年度文化遺産総合活用推進事業

大人の勉強会

進士五十八氏

福井県立大学学長

歴史と継承

序 狂言・水掛婿 佐藤友彦

1 文化芸術と考える「農業」

2 自然とは何かー自然への節度

3 歴史は、歴史だけを知るのには不十分。それをどう考えるか。

雅楽一管

● 新城市 四谷の棚田・鳳来寺山
● 世界遺産 仁和寺
● 名古屋市 鶴舞公園



新城市四谷の棚田 撮影:小山崎二
名古屋市鶴舞公園 撮影:後藤敏夫

大人の勉強会

福井県立大学学長
進士五十八氏

福井県立大学学長、農学博士、造園学者。元東京農業大学学長、同大名譽教授。2007年紫綬褒章受章。2015年内閣みどりの学術賞受賞。著書「日本の庭園」(中公新書)、「日本庭園の特賞」(東京農大出版会)、「グリーン・エコライフ」(小学館)、「アメニティ・デザイン」(学芸出版社)ほか。

Shinshi Isoya

世界遺産
真言宗御室派
総本山仁和寺

仁和寺は仁和4年(888)に創建された寺院であり、現在には真言宗御室派の総本山です。境内には五重塔や二王門など江戸時代に建立された建造物が並びます。同時期に植えられた御室桜は4月中旬に見頃を迎えますが、建物と同様、当時と同じ姿を現在に伝えています。平成6年には世界遺産に登録されました。

9月19日(日)当日の様子は10月1日にYouTubeで動画配信されます。

企画制作:日本の伝統文化をつなぐ実行委員会

関連事業

公募写真展 **アイチに思い「ハセル」文化遺産写真展**
写真募集期間:2021年7月1日(木)~12月31日(金)
展示期間:2022年1月22日(土)~27日(木)
展示会場:ソニースタジオ名古屋

映像・写真展 **新城市四谷の棚田**
展示期間:2021年10月9日(土)~21日(木)
展示会場:ソニースタジオ名古屋

数寄屋を身近に文化交流 **能楽師と「数寄屋」の景色**
2021年10月2日(土)安城市・丈山苑
2021年10月24日(日)西尾市・旧近衛邸
能楽/シテ方 吉沢勉、太鼓方 加藤洋輝

ちくさ座 (千種文化小劇場)



名古屋千種区千種三丁目6番10号
052-745-6235

新しい道と古い道、どちらを通りますか?と聞くとだいたいの方は、新しい道を通りたいと言ってしまう。古い道を選ばない理由は、「傷んでいて歩きにくい」とか、「お店もなさそうだから」とか、そんな声が聞こえてきそうです。古い道の「歩きにくい」「お店もない」という、マイナスなことよりも、もっと大切なものがあることを知ったらどうでしょうか。

そこで、歴史と継承から、その大切なものへ向かう手がかりを習得したいと考えました。

効率、経済優先の時代に、個々の思いはどちらかと言えば後廻しにされてきました。

少数よりも多数が優先でもありません。しかし、そこには絶対生まれないものがありました。

職人の仕事です。庭師も工芸家も、陶芸家も、能楽師も、伝統を継承しながら学び続ける人達の「こころ」です。「こころ」というより、「鍛錬に向かう環境」ということでしょうか。伝統を学ぶことは、過去は消えて無くなるもので、積み重ねられていきます。ですから今も過去も、すべてつながっているということをお学んでいるのでしょうか。この勉強会、さまざまな話題が飛び交いますが、あとはさらに考えて皆さんで磨いていただければと思います。(市川)



大人の勉強会

「歴史と継承」

日時…2021年9月19日(日)午後1時半
場所…名古屋市中区千種文化小劇場

出演者 進士五十八(造園学者、福井県立大学学長)
小山舜二(柵田保存会会長) 映像出演
湯浅大司(新城市、設楽原歴史資料館館長)
金崎義真(世界遺産仁和寺/財務部拝観課)

進行 市川櫻香(日本の伝統文化をつなぐ)



「百姓」の定義

【進士】 皆さんこんにちは。私は造園家です。つまり公園とか庭園とか、環境をやっております。比較的広い国土レベルのことも大分今までやってまいりました。

農大の卒業生で、造園家以前に農大の学長も長いことやりましたから、百姓の話を中心にします。
私は、「百姓」というものに私なりの定義をしています。広辞苑などでは「いろいろな職業のすべての人たち」としてある。ただ、私の定義は「百」はたくさん、そして「姓」は名字です。アメリカ大統領のカーターは「運送屋」、万年筆のパーカーは「公園の管理人」という意味です。ですから、名字というのは大体職業をあらわします。

「百姓」というのはたくさんさんの名字、つまり昔は名字というのは職業だと思っていて、職業というのは能力、特にそのことにひいていてということなんです。ですから、古代の姓で「大伴」というのは軍人です。それから、「中臣」というのは神主の言葉、神様の言葉がわかるということなんです。のように日本でも、ヨーロッパでも名字は職業をあらわしますし、私はそれを能力だと理解しています。

つまり農民というのはたくさんさんの能力がないとできない仕事です。水田というのは非常に特殊な農地で、ヨーロッパにはありません。この東南アジアを中心に、雨の多いモンスーンだからこそ水田が発達します。水は高いところから低いところを下りる、わずかな差で落としていって全体を潤すという水の使い方です。今は農業土木が発達して、いまや水道管をバルブで流す。けれども、本当の田んぼは上から順番に落としていってすべての田んぼを潤す。今の話も水の量が少ないので上のところで終わっちゃって次に来ない、それで争うわけですね。

様々な能力が必要な百姓という仕事

私が言いたいのは2つ、鍬でお話ししようと思ったのは、道具を全部村の鍛冶屋がつくるのです。鍬の角度を見ると直角度ではありません。耕し方は、固い土の場合は相当角度がついて、これは平たい鍬ですけれども、もう一つ刃になっているものがあります。相当固い土の場合はこんなに広いとやれない、つまり鍬というのは人の力の道具ですから、おじいちゃんだと体力がないから平鍬でなくて刃のついたほうとか。

ですから、百姓というのはたくさんさんの能力が必要、つまり道具である鍬一つも全部手づくりで、そして自分の田んぼや畑に合わせてつくるのです。もちろん金具は使えないので、村に鍛冶屋がいるのです。つまり大阪の堺に鍛冶職人がたくさんいるのであそこに住むというものではない、つまりその土地に合わせて、砂っぽい土とか、粘土っぽい土とか、みんな違う。柔らかい土なら鍬の幅も大きくて一遍にたくさん掘れる。しかし、固い土は相当急でないといけないんです。

教科書でいう「モーメント」、力のことです。そういう知識がないとだめなんです。それはもちろん経験的にやっています、数学とか算数ではない、土地をよくわかっている、水は

上から低いところへという地形。でも、土質において、例えば根菜類、ダイコンとかニンジン、ゴボウなどは柔らかい土でないといけない、葉っぱの野菜と根菜類とは違う。その土地に合わせて作物を選ばないとやっていけない。北海道と沖縄では気候が違うから全然違います。今は温暖化でそれが崩れていて、大変やこしい時代です。

自然のことも、土のことも、そして体を動かす、例えば酪農地帯で草を刈るには鎌を使う、鎌の刃が長いと一度にたくさん草が取れる。もちろん腕の長い人はいいけれども、そうでない人はだめだから、それに合わせて「マイ鍬」とか「マイ鎌」をつくるわけです。

「結(ゆい)」という制度

もう一つは、村には「結」という制度がありました。柵田のような風景は今や希少価値で、なぜ柵田が発達したかというところ、水は高いところから下りてくるからです。「山田の中の本足の案山子」という言葉があるのは、田んぼというのはもともと一番低い中世紀平野にできたものではないのです。山田からスタートする、山田でない水を落とせない、ポンプがないから自然流下でないといふことです。その後ろにもっと大きな山があって、そこから水を引く。

実は「結」というのはコミュニティの組織で、協働しないといけないということ。つまり百姓の世界では1人では生きていけないということ。土地や自然があって、その土地の条件を十分踏まえて生産する。それは1人の仕事ではできない、少なくともこの柵田は1世代でできるようなものではなく、何代も何代も先祖が少しずつ広げていったわけです。しかも水を一筋で下ろせるようになっていく。田んぼの中はもともとも山ですから、扇状地なら転がっている石がいっぱいある、その石は端へ寄せておいて段に使うわけです。そこにあるものを全部有効に使って、農地を整備していった。今のようにコンクリート、アスファルトでやってしまおうとは全然違う世界がそこにあった。

もう一つは、共同作業でないと1人ではとてもできない。現代社会の社会学者は、もっぱら農村社会は封建的で嫁姑の問題が大問題というネガティブなことばかり言うけれども、その人たちはとても豊かな生活をしてきたからです。でも、その人たちが米をつくっているから食っているのに、今の社会はつくる人はあまり恵まれなくて、消費する側が威張っているわけです。金融とかそういうもので動いているわけですから、生産をしない人が世の中を支配していると言ってもいいわけで、もう一回、人間が生きていくのは何かということを改めて先ほどの狂言は教えてくれたと思います。

それは命にかけて水が大事だからです。きょうのテーマである「自然」というものの重要性の話で、農業の「農」は「み」のり」とも呼びますが、そういういろいろな過程を経て実りがあるって生きているんですね。

自然は全部つながっている

最初に柵田のお話をしましたが、柵田だけを注目してはい



けない、自然というものは全部つながっている。日本の国土は海で囲まれているが、実際は大陸で地球になっているわけですから、全体でものを見たいと思っ

これをわかりやすく言うと、今「エコロジー」ということが盛んに言われます。「環境と人間の共生」、その場合は「ワイルダネス」というのが最初です。非常にワイルドな視点、「野生自然」です。これを重要視したのは実はアメリカで、「野生自然」という概念は日本にはあまり強くありません。アメリカはヨーロッパの移民でできている国です。言い方は悪いけれども、食いはぐれてしまった人たちがたくさんヨーロッパからアメリカへ行く。彼らはアメリカ人という自分のアイデンティティを持ちたいのです。そのときヨーロッパになんかは何か、「ワイルダネス」です。ヨーロッパはほとんど人間が壊したところなんです。ですから、シユバルツヴァルトというのは大変有名ですが、「黒い森」、あれは「森」と言っているけれども、私から言うと「林」なんです。

実は私は、明治神宮の総合調査を10年ぐらい前からお手伝いしてきました。明治神宮は私の恩師の上原敬二先生のアイデアでできたと思っています。今は原宿と渋谷の間にずっと広がっていますが、あそこはほとんど荒地でした。彦根の井伊さんの下屋敷で、今の御苑というところだけに庭園があったのです。そこには湧き水が出ていて、もともとは加藤家の屋敷だったので「清正の井戸」というのがあります。湧き水があるから少し木があった。しかし、それより後ろの今の御本殿から原宿のほうまで、七十数ヘクタールありますが、スキが生えてほとんど荒地、少し乾燥地です。アカ松などは幾つか生えていました。しかし、山手線のところは昔、この鶴舞公園と同じで汽車が通っていましたから、ばい煙で松類は全部やられてしまうという状況でした。そういう中でいろいろな種類の木や、いろいろな高さの木を植えて森をつくった、ちょうど昨年で100年になりました。私は日比谷公園もやっています。日比谷公園の設計者が本多静六で、その方が明治神宮の森もやっています。そして本多さん自身が鶴舞公園もやっています。日比谷公園と鶴舞公園はそういう似通った考え方があります。明治神宮は実は人のつくった森です。ですからワイルダネスというのはないのです。

これは鳳来寺山です。中国の山水画のようですが、これもワイルド自然です。しかし、日本の自然は絶対お寺とか神社が入るのです。アメリカの場合はナショナルパークになって

いる。イエローストーンとか、ヨセミテとか、国立公園がたくさんありますが、それは本当に人の入っていないワイルド自然です。クマやオオカミがいっぱいいたところで、これはアメリカ人にとつての自慢だった。ネイチャーライティング、ある種文学の中で自然を読む、「ウォールデン」という言葉があります。ヘンリー・デイヴィッド・ソローという人が書きました『森の生活』、そういう自然と対話しながらの文学が発達したのがアメリカです。それは捨ててきたものさとのふりさであるヨーロッパとの差別化を意識して、そしてアメリカ人は自分たちのアイデンティティーをつくってきたからです。

日本の自然と人間の優れたつながりⅡ「里山」

日本人である我々にとつてどういう自然か、大自然はあります。私は今、福井県で里山里海研究所の所長も兼ねております。その里山というのは、住んでいる場所、農村、そこは「里」といいます。田んぼや農地のところを「里地」と呼びます。さらにそのまわりに木がいっぱい生えていて、落ち葉や薪をとったりするところを「里山」といいます。ですから、私はワイルダネスの次は「家畜」だと言っている、自然を飼いなしたものです。



例えば鶏、鳥というのはワイルド、野鳥です。しかし、それを人間の役に立つために毎日卵を産む、鶏だつてそんなに毎日産まないが、卵をとるために家畜にして改良したのです。そういうのを鶏といいます。「庭」というのは人間の暮らしの身の回りです。自分のまわりに安心できる場所をつくる、これが「庭」だったのです。農家の庭は農作業をする場所です。

畦をつくり、その畦には大豆を植えました。それがビールについてくる枝豆です。あれは畦を有効利用した、農村というのをつくれるところを徹底して使ったのです。今風に言う「多様性」、2010年COP10はこの名古屋でやりましたが、そのときの環境省が海外の人たちに日本の自然と人間の関係はすばらしいと、生物多様性の根底はそこにあるという主張をして、COP10のときに「里山イニシアチブ」というのを世界に発信した、画期的な出来事です。日本の行政が世界に向かって、日本のあり方がすごい、模範だと言ったのは初めてだと私は思います。その「里山イニシアチブ」の政府方針をつくらうということで、私は座長でそれをまとめて報告書をつくりました。

里山というのは、日本の自然と人間の関係性の最もすぐれ

2

たところですか。身の回りを自分が安心できるようにする、例えば北陸で言うと、砺波平野みたいに田んぼの中に「屋敷林」をつくって、「カインヨ」とか「カインナ」という言い方をするので、田んぼの空間という意味です。ワイルドな自然、日本海側の強烈な冬の風から家を守る、屋敷林があると暖房費が大体3割カットになります。強い風というのは作物も育たなくする。

人間というのは、そういう強い風で熱を奪われたら生きていけない、あるいは燃料費がたかさんかかるので、木を人工的に植えたのです。明治神宮もそうやって植えました。これは献木です。日本中から木を寄付させて植え、青年団が労働奉仕をしたのです。国家でやるのと国民がやるのとの違いです。

昔から神社というものを大事にしたのです。それはどの村にも氏神様があって、鎮守の森があったからです。明治神宮の森は単純に鎮守の森の大きいもの、東京の鎮守の森のようなものです。鎮守の森は、私からいうと日本型公園だと思っ

ている。日本人は、村の中心にそういう尊敬できる、神様が

おられるような立派な木があると「御神木」といって、何となく自分たちを見守ってくださるような場所に神社をつくる。それはいつも木も手入れするし、掃除もするし、ちょっとした広場があつて必ずそこで盆踊りをする。

相撲で横綱は綱を締める、つまりしめ縄です。御神木も立派な木にしめ縄をめぐらせて、それを神とする。これも私は日本人と自然の関係の象徴的なすばらしいものだと思う。

例えばアメリカのナショナルパークに大きな岩がある、そこに大統領の顔を彫っているのです。山そのものを削ってやっ

てしまう。日本人は本体には傷をつけません。その木、その

岩そのものにしめ縄だけめぐらせて神様にするのです。これがマンメイドで形にしてしまうというのがヨーロッパの庭園です。だから、ヴェルサイユでも、木を動物や三角や四角や丸にして造形してしまう、全部人間で支配してしまうということをやれるけれども、日本人は、手は加えますが、本当におとなしく自然を壊さないようにしてきた、これが「家畜」のやり方です。自然としての本質も生かしながら、しかし自分たちの役に立つようにも手を加える、ほどほどということ



孔子の「五十にして天命を知る」ということで、今ここできつかけをつくって世の中に尽くさないと、俺は一生を棒に振ってしまうからというので棚田保全にかかった、全国で初めて棚田を公に残すように仕掛けたのは自分であると思っております。

ここは1カ所から、鞍掛山のす野のところが斜めになっておりますが、そのところがほぼ台地になってるわけです。そこへ雨が降り注いで浸透して、ここは全部湧き水です。田んぼで湧き水というのは、これほど過酷な米づくりはないわけです。田んぼの水が冷えている、稲は温めた水でないとだめだからどう工夫して温めるか、湧き水だから米がおいしい、これはとんでもない、冷たいところで米ができるわけがないから、温めないといけない。

だから、1人の家で1カ所から入れて、その水をまいて、最後に排水される。温めるためには狭い田んぼだけれども犠牲を払って、「アト（排水口）」という言葉ですが、そこで沢みたいな湧き水を受けて、温めて田んぼへ入れている。

田んぼは稲をつくるどころ、ただそれだけではなく、これだけ大勢の人が春夏秋冬来るといって、要するに1枚1枚の田んぼを「ピオトープ」と位置づけたわけです。ピオトープはそもそも生き物の空間です。だからみんながこうやって遊びに来るのもピオトープ、それで生き物のいないようなところは田んぼじゃない、例えばオタマジャクシが泳ぐことによつて田んぼの除草効果が生ずる。そのオタマジャクシ、カエルを追うヘビやイモリなどが動くことによつて、また除草効果が生ずる。カエルがいることで、今度はそれを狙うヘビが増える、その上にワシ、タカ類が来て、クマタカまで来るようになった、そういうサイクルをつくったわけです。

生き物と共生した体



にやさしい米づくり、田んぼの生き物が増えることによつて、カエルが稲の上に登って1日200匹の害虫を食べれば、殺虫剤は要らないわけです。そういう効果があるということをあちこちで書いていたり、いろいろしています。(トーク)

【市川】これが四谷の棚田ということですね。

【進士】今おっしゃられたとおりです。私が家畜化したということを言いましたが、稲というのはもともと亜熱帯性の植物ですから、冷たい水じゃだめなのです。ところが都会人は、冷蔵庫で冷えた冷たい水が一番おいしいので、米も喜んでい

鳳来寺山について

― 設楽原歴史資料館の湯浅大司館長

今日は、新城市の設楽原歴史資料館の湯浅大司館長に来ていただき、お話を伺っています。



【湯浅】きょう私がお話しするのは、信仰の山ということ、鳳来寺山のことについて少しお話をさせていた

鳳来寺山は、私がいる新城市の中にある非常に古い山です。できてから1300年ほどたつていと言われているお寺です。これは本堂のところからとつた動画ですけども、下の方から煙が出ていて、昔この山は「煙巖山」と言っていたと言われております。

このお寺を築いたのが利修仙人という方で、もともとこの鳳来寺の仙人でおられたのですけれども、1300年ほど前に文武天皇が病気になられた際に、この方が京都まで出向いていきまして、祈禱をして文武天皇の病気を治された、そのときに鳳凰に乗ってこられたということで、「鳳来寺」という名前がついたと言われております。

これがこの鳳来寺山の全景になるのですけれども、この北のほうに今の四谷千枚田がありまして、その下のほうに鳳来寺山があります。山頂にお寺があるのではなくて中腹にお寺がありまして、非常に関係深いところで湯谷温泉という温泉街があります。なぜここが関係深いかといえますと、もともと鳳来寺の御本尊がお薬師さんになります。病気を治すということ、単に祈禱だけでは病気が治らないものから、恐らくこの湯谷温泉もこの利修仙人が開かれて、いわゆる湯治をしながら病気を治すと言ひ伝えられているのだらうと、それで湯谷には今お薬師さんの像も残っております。

こちらは仁王門にかけられている額ですけども、この字は光明皇后が書かれたという伝説が残っている非常に古いものです。今ここにかかっているのは、江戸時代くらいにつけかえられたレプリカだと言われているのですけれども、そ

いうものがございます。

これが元禄ごろ、1700年ごろの鳳来寺山を描いた絵図です。一番上にあるのが鳳来寺になるのですけれども、非常にたくさんのお寺がずっと連なっていて、江戸時代は非常に栄えたお寺だったと考えられております。鳳来寺の少し北のほうにはもう一つの建物、東照宮がございます。

このように非常に栄えていたわけですが、もともとこの鳳来寺は、門谷（カドヤ）地域から1425段という非常にたくさん石段を登っていくお寺です。この石段沿いにたくさんのお寺があったわけですが、火災等で焼けてしまっ、今はもうほとんど残っていない状況です。

ここから少し上がっていくと、「傘杉」という大きな杉の木があります。この杉は、高さが日本一だと一時間言われていたぐらい非常に大きな杉ですけれども、ちょうどこの中央のところにしめ縄がまいてあります。これは四谷千枚田の方もかわってしめ縄をまかれたと聞いております。

この赤く示してあるところが仁王門になります。仁王門も今、国の文化財に指定されておまして、よく見える高い場所に、先ほど申し上げた光明皇后の額が残っています。両サイドには当然仁王様が入っております。それから矢印のところは「ぞうどういん」と書いてありますけれども、今このお寺が松高院というお寺に変わって残っております。

鳳来寺にはたくさんのお寺がありますが、天台宗と真言宗の両方を兼ね備えたお寺だったので、松高院というお寺はその一つを守っていたお寺で、もう一つは医王院というお寺になります。これも建物が半分痛んではいるのですけれども、残っております。この松高院と医王院が天台宗と真言宗のトップ2として、鳳来寺を両方の宗派で守るという形ですと残ってきているという、少し変わったお寺になります。

ずっと行くと大仏が描いてあるのですけれども、今この大仏は残っておりません。その横に本堂があります。本堂は近代になって再建されたもので非常に新しくは新しいのですけれども、その奥のほうに鏡岩という巨大な岩がございます。先ほど先生のお話にもございましたように、やはり大きな岩がこの鳳来寺の御神体のような、非常に大切なものになっております。なぜ鏡岩かというと、昔この岩は遠くから見てキラキラ光っていた、松脂（シヨウジ）岩という光りやすい石でできている岩で、非常に遠くから見えたと言われております。

鳳来寺の本堂の奥のほうに東照宮がございます。東照宮は皆さんご存じのように徳川家康ゆかりの御本尊で、御神体が徳川家康公になりますので非常に縁の深い場所になるわけです。ですので、幕府直轄で建てたのがこの東照宮ということになります。

この鳳来寺にかかわる浮世絵が幾つか残っておりますので、簡単に紹介します。中央あたりに滝が流れております。今はこんなに大きな川はないのですけれども、妙法の滝があります。

これが「行者越」といまして、鳳来寺山自身は修験の山にもなるものですから、このように崖をよじ登っていくようなところもございます。今もこの行者越という場所が残っております、急峻な崖をずっと上がっていく、私も子どもの



災で焼けたと言われております。

これが秋の鳳来寺です。秋はやはり紅葉が非常にきれいで、紅葉で真っ赤になるほど出てまいりますので、自然の様というのをすごく触れられるところだと思えます。

先ほど映像にも出ておりましたが、真ん中に松の木があるので、昔どうしてこんな岩場に松があるのか、そういうところもやはり自然の造形なのかと感ずることが出来る場所になります。

非常に駆け足でお話をしましたけれども、簡単に鳳来寺山のご紹介をさせていただきます。



【市川】 愛知県の鳳来寺についての映像と、お話を伺いました。湯浅館長、ありがとうございます。

【進士】 私が最初に言ったのは、日本の自然は「大自然」、「小自然」、「小自然」というとわかりやすいということと、「ウィルダネス」の話をしました。日本の場合は文化になっているのです。修験道のお話をされたが、つまり日本人の頭の中に自然との関係が非常によくできていて、ナショナルパークというのはウィルダネスで、人の影が一つもないという前提なのです。それがアメリカ大陸でした。

ところが、日本は古代から山を見ると、「役（エンノ）行者」でも何でもそうだけれども、ほとんど日本の名山というのはそれなのです。だから、自然であると同時に人間の歴史の跡が入っていて、強いて言うとなスピリチュアルランスケープ、自然を心で捉えているのです。

ころに上がったことがあるのですけれども、こういう場所がございます。

こちらは、東海道の絵図の中に「鳳来寺」と入っているのですけれども、東海道の中の名所の一つだったと言われているものになります。ずっと大名行列の絵が描かれておまして、上のほうに三重の塔があります。昔は三重の塔があったようにすけれども、幕末に火

【市川】 その日本人の特色と対比し外国の登山家はアタック、自然を征服したみたいな言い方をしますね。

【進士】 だから、「エベレスト征服」という言葉をふつうにジャーナリストは使っています。

【市川】 でも、植村さんとか、「自然とともに」、「自然を感じる」ができた、「自然の中に生かされた」という言い方をされている、日本人の感性だと思っています。

【進士】 そういう関係を先祖代々ずっと受け継いできて、わかりやすく言うと、自然を尊敬するでもあがめるでもそうだけれども、僕は別物としてじゃなく、最初から一体なのです。だから、ヨーロッパでは資源として見る、石炭がとれるとか、木材がとれるとか、自然というものをそういうふうにとるのです。そこに経済的な財があるかどうか、もう少し人間的なものもあるでしょうけれども、そういう意味ではなくて我々は一緒なのだね、そこが大きく違いますね。

【市川】 「自然の中で生かされている」という言い方を日本人は言います。

【進士】 生かされているし、生かすように努力してきたのだね。先ほどの棚田など、かわいそうなら大変なのですよ、厳しい状況なのです。厳しい状況でもやはり自然を上手に使ってきたのですね。

【市川】 鳳来寺山のご住職が「自然の中で人間のやることなんて、ちょっとおできができたぐらいのことですからね」と言われたのが印象的でした。

自然と人間の一体化を進めた日本

【市川】 進士先生から、もう少しお話を伺いたしましょう。

【進士】 歴史に入るとまた違うフレーズの話なので、自然の話だけとめて話します。

私は「大自然」、「中自然」、「小自然」と言いました。大自然はウィルダネス（野生）。



ただ、ウィルダネスというのはアメリカの概念で、日本のウィルダネスはないというのが私の主張、日本列島というのはすごく野性的です。沖縄のヤンバルクイナとか、あるいは環境省の自然環境の専門家は世界自然遺産といって、その自然だけフォーカスを絞る。けれども、日本の国土は修験道のような方たちがいち早く自然のすごさ、自然と人間の生き方、人間の生き方を自然に投影してやっている、それが山岳信仰です。

仏教でも、最後は出羽三山みたいなところに入って、人間も自然の一部としてミイラになって即身成仏。仏教は自然と一体化してきている、そこが人間と自然を対置するというより、むしろ一体で来たということが日本のすごさで、ウィルダネスという考え方はない。

一方、その根っこには神道に近いものがある。先ほど鏡岩が出ていたが、日本では昔から大きな圧倒的な岩場を「磐座（イワクラ）」とか「磐境（イワサカ）」という言い方をしました。これは古代のアニミズムです。ふつうには見られないような大きな岩、あるいは大きな木には神様がやどると考えられて、これを「神籬（ヒモロギ）」といいます。大きな水面は「水垣」と言いますが、それが全部日本庭園になっているわけです。日本の庭園は完全に家畜やペットに近いものをつくらなければ、そこは大自然を投影しているわけです。これから仁和寺のお話がありますが、仁和寺もそのように一体になっているのです。まず御室の自然環境全体がある。ふつう観光的には見物なのですが、見物でなくて拝見、拝観となる。観光の「観」はもっと深く見るわけで、拝んでしまうわけです。気持ち的にはそうなのです。ただ、お布施でもお賽銭でも昔は気持ちを出したのですが、拝観料を徴収することになってから、もう拝む対象でなくてお金を払って見に来たみたいになってしまふ。

福井県の県立大学は永平寺町にありまして、私は大本山永平寺とおつき合いをしていますが、なかなかこら辺が難しいところなんです。もともと日本人の非常に素直な、敬意を表してつい拝んでしまふ、そういう「磐座」とか「神籬」であるべき。だから、京都の禅宗の寺は山の中にあるべきです。中国でもお寺は全部山の中です。ブツダが水の流れる首は仏の声だと言ふ、自然環境です。

ただ、一方の文化として美しいものをつくる、人間が自分たちの思想とか意識とか、より美しくなりたいとか、そういうクリエイティブティがある。そうなる今度本場の文化を追求する、全く違ったフレーズになってきた。京都は文化的な環境なので、一応禅の庭というのは自然環境を想定しているわけです。

永平寺などは本場の山の中、永平寺川という川の渓谷です。私は本来そういう環境が修行する場所だったということも知っておいてほしいと思います。

仁和寺についてー仁和寺 金崎義真僧侶

【市川】 それでは、仁和寺の金崎様からお話と映像をお願いします。

【金崎】 今から私がお話しする内容は、お寺の話とか、精神的なこととか、スピリチュアルなことはではなくて、すごく俗っぽいことです。

仁和寺は888年にできまして、1100年代に少し火事で焼けて、応仁の乱で焼けました。その





後、再建するまでに170年ぐらいかかり、江戸時代に徳川3代家光將軍のときに、ちょうど徳川の平和な時代が来て、2代、3代とそろそろ信仰にも力を入れなければと、そんな歴史的な背景の中で再建がなかった寺院の一つであります。

その後は現代に続くが、もう一つ大きい節目は、先ほど先生が明治神宮のお話をされましたが、あれは全国の都道府県、北海道から沖縄までの樹木を集めて、幕末の日本が近代の光景を切ったときです。仁和寺の最後の門跡、住職が純仁法親王といまして、後の小松宮ですけれども、そういう歴史の節目、歴史的な要所に出てくるのが仁和寺というお寺になります。

これは宸殿ですが、公家、天皇家とのつながりがありましたので、こういう御所の建物があるのも仁和寺の特徴です。先ほど市川さんが、仁和寺には「ふくよかなお花」があると、これが仁和寺の御室の桜です。背丈が低いのが特徴で、実際この下に人工の粘土を敷きまして、実根が下に伸びないようにして、背丈をコントロールしているのです。当時の技術を使って庭園にしたのではないかと思います。

この金堂は、御所の紫宸殿から移築したもので、徳川3代將軍の家光が公武合体で嫁がせましたから、そのときに紫宸殿を献上して、その古かった紫宸殿を仁和寺の再建のときに使った。当時の天皇と仁和寺の住職が兄弟ですからそういった背景もあるのかと、ここは推測ですが、因果関係はあると思います。

お堂の中に仏さんがおりますが、当時の江戸時代の生活レベルから考えますと、これだけ大きい建物の中に彫刻や密教絵画、色鮮やかな染料、顔料を用いてお堂の中をつくっている、つまり非日常的なものを仏さんの世界に置き換えることによって、信仰の対象にしたのではないかと、そういうのが当時の仁和寺の特徴かと思われれます。また、こういう宝物類もたくさんありますので、見ていただいたらいいのではないかと思います。

仁和寺の紹介はこのあたりにして、本題の活用のお話をさせていただきます。

仁和寺というのは、皇子皇孫が住職を務めて、出発が国の安寧、鎮護国家を拜むお寺だった。その他地域に点在するお寺は、地域の人々のため、村のため、疫病がはやらなくするためにつくったお寺、その土地の目的に合わせてつくったお寺があります。

寺の場合には天皇家、もともと出発は自分のお父さんをお祀りするたためにできたお寺ですけれども、途中から少し目的が変わりまして、こういうお寺になっております。

そういう歴史的な背景もありですが、実際に幕末以降、国、天皇家の管轄を離れまして、民間で運用していくよ

うになるのですけれども、今ちょうど約1100年たちまわって、土地・建物としては約24万坪の土地があります。24万坪の中に宗教礼拝施設が大体140棟あります。国宝は1棟ですが、重要文化財が14〜5棟、その他で約140の施設があります。あと事務所やトイレ等を入れますと150〜60あるのですが、これらを維持管理していかないといけない、仁和寺の財産を担保していくために維持管理をする。

過去に遡りますと、仁和寺は莊園がありまして、そこからの財をいただきながらお祈りすることに専念していたわけですが、時代が変わりまして、京都は幸いなことに歴史・文化の中心ということで、拝観料をいただくことによって仁和寺を担保にすることが、この50年ぐらいい進んでおります。

その中で、コロナ禍もありますし、社会環境の変化もありますし、お寺の建物を守るといよりは、仏を守る、実際はお寺の祈りのスタイルをキープするためにどうしても仏さんもお堂も要りますので、それらを守っていくための手段として新しいことを取り入れよう、そういう考えにこの5年ぐらいい少ずつかじを切り取り取り組んでおります。

しかし、何をやっていいというのではなく、仁和寺の歴史から逸脱しない、自分たちの抱えている環境から大きく踏み出さない、そのあたりをベースにしなが、新しいものを取り入れて進んでおります。新しいことを進めるに当たって、大切にしていることがございます。

確かに最近テレビに出たり、いろいろな雑誌に出たり、「変わったことをやっている仁和寺さん」とよく言われるけれども、すごく大切にしていることは、一つは歴史調査をおろそかにしていないということと、一つは皆さんに知っていただきたい。古文書類が約3万典ありまして、目録調査をとり、どこにどういうものがあり、何が書かれているかを記録する。このあたりは昭和50年代で終わっておりまして、次にはデジタルアーカイブを進めていく。その次に土地・建物の図面をとり、もちろん安置されている仏様も同じです。時には歴代門跡のお位牌も採寸したり、記録ということをベースに置きまして、その記録を紙媒体にとどまることなく、デジタルデータを活用したり、最先端の技術も取り入れながらストックするということを念頭に進めています。

その基盤となるデータがあることによって、世の中の前に出て行ける。例えばテレビに出るとか、映像をつくるとか、何かを解説するときには、根拠となるようなものをしっかりと調査していつでも出せる状態にして、それをより効果的に周知できるように考えるのが世間の人々です。その人たちに自分たちのデータを提供して使っていただく、そういう取り組みを進めています。

次に、よく1泊100万という話が出てくると思うのですが、けれども、こちらの建物はもともと仁和寺の24万坪ある裏山に、当時の宮付だった寺侍の久富さんという方が仁和寺に寄贈した建物がありまして、時の門跡が大切に扱おうというお手紙まで交わしているのです。そういうことも仁和寺の文書の中にありまして、それらを大切にしていたのですけれども、何に使うことなく建物がぼろぼろになりまして、昭和50年代に修理して平成の時代になって終了したわけですね。けれど

も、使わなければただ壊れていくだけです。

これは護摩焚きですけれども、先ほどのシーンは声明、境内の一般の人たちが入れるようなところを公開して、もちろん宗教体験をベースに考えているのですけれども、その建物に宿泊した人は独自の体験ができるプログラムを構築して、使うことによって建物も維持されますし、もちろん掃除もしますし、それ相応の対価も入ってくる、その入ってくる対価によって、それですべてではないですが、建物を修理していくことを念頭に置いているプログラムです。

この松林庵というのは、150棟あるうちの一つの建物ですけれども、歴史的な背景も仁和寺のエピソードがございまして。これが京都の植治さんという人が作庭した近代的な庭ですけれども、この約7000坪のエリアを貸し切って、お堂の中で阿字観（アジカン）をしたり、護摩の体験をしたり、そういった取り組みをしているということですね。

また、右上のほうに茶室がありますが、見学するだけではなくて、実際に上がっていただく点前をす



る。もちろんお茶の先生に入れてもらうのではなくて、雰囲気も味わってもらう。室内から見るということによって、当時そこを本堂に使っていた人たちの視点に戻りますので、歴史的にフィードバックする、時間が過ぎるといふ疑似体験もできます。

少し変わったことをやっておりますが、変わっているのは情報で切り取られた部分でして、しっかりとした裏付け、節度、そこに仁和寺の活用ガイドラインを引いて使っているということですね。もちろん使えば傷むのは否めないのですけれども、そのリスクを回避するために、例えば昔のように拝観者が1日1000人、2000人ということではなくて、1日に5人だけとか10人だけとか、少人数で対応することによって、事故やリスクの軽減を図っている、そういう今の活用方法をしています。

(トーク)

【市川】 やはり1泊100万という催しを仁和寺内で通していくのは大変だったと思います。仁和寺内に通していくことのご苦労はありましたか。

【金崎】 一つは、今の仁和寺の運営というのは、過去の寛永時代に再建した建物や、近代になって造成し直したこのお庭、当時の先端と言われる人たちの財産によって今の運用が成り立っています。これはもう事実であり、変わりようがありません。

そこで、今の仁和寺というのは、やはり近代の作家さんのものを取り入れるとか、文化財修復にはもちろん力を入れているのですけれども、お寺関係者の人も古いものはリスベクトして評価をするのですが、なかなか古いものによって今が

成り立っているという考えに、理論でおっしゃる方がいても実際に体現する人がなかなかなくて、そういうところで進めるのはすごく苦労はしました。

それで、若い人たちや理解者を何人か集めまして、今のものを取り入れて過去のを残していく、その繰り返しで今の仁和寺があるということを説明して、歴史や過去の経緯、そこから取れないような選択をして進めました。

もちろん今の選択が未来にとって悪い結果を残すということもありませんが、それを後世の人に振るのは厳しいところがあります。そこから逸脱しないよう熟慮して進めました。その辺が一番苦労したというか、大変だったなと思うところですね。

【市川】 自分の持っている文化遺産とか資産、またそれをどのように活用していくのかというのはなかなか気づかない。

【金崎】 やはり目の前でやっているとなかなか気づきにくいことがあるので、やはり今置かれている状況を分析するために、例えば24万坪の土地とか山の地形を測量したり、今の自分たちの財産を、よく言う「見える化」して、そこから整理していくということでしょうか。

【市川】 金崎さん、ありがとうございます。

【進士】 敬意を表します。本来、文化財を未来につなぐのは国の仕事です。それを仁和寺さんは自助努力をされている。私の個人的な意見ですが、日本は敗戦してGHQが入って宗教法人法というものをつくったわけですね。お寺とか神社は全部宗教法人法によって、いわば自助努力するしかないことにした。特定の文化財保護法で指定したものについては援助して、修復とか復元とかやっている、国は何もしていないわけではない。ただ、こういう歴史的な建造物はそれではフォローできないことがいっぱいあるわけです。まず庭は、植物は毎日成長しますから手入れしなきゃいけない、だから100万円は、私の思想では正しいと思っっている。

仁和寺は本当に美しいし、やさしいし、優雅です。女性的



といってもいい。小松宮様というのは還俗（ゲンゾク）して明治政府の要になるが、上野動物園の入り口に銅像があります。それぐらい近代日本にも貢献した人です。

【進士】 日本の皇室というのは、本当は天照大神で神様だった。けれども、仏教が入ってからは両方の担い手、サポーターになるわけです。それを通して国の鎮護をやることはもちろん、聖武天皇のころからそうだけれども、庶民はほったらか

しというわけではなく、それはそちらでまた分担する坊さんが出てきた。そういう意味では、仏教は日本を物心両面で相救ってきたわけです。弘法大師が杖をつくると水が出るというのは公共事業です。

そのように考えると、日本人の生活を豊かにして物と心で救ってきたのは両方です。神様と仏様を分けなかった、まさに日本文化そのものだと思うのです。

それからこっちは別の能力がある、お花の御室流の家元だから、そういう文化的なリーダーでもある。

日本文化というのは、もともとお寺も神社も、キリスト教みたいな一神教の宗教で、それを信じるか信じないかと迫っていくような、あるいは神との契約のような論理でできていない文化なのです。まさに今で言う多様性を尊重している、それから人間と自然は共生するとか、命あるものは共に全部平等であるという、御室の桜みたくなものなのです。

【市川】 ほっこりとしたものですね。

【進士】 それを近代主義の法律屋が切って整理しちゃうようなことでは、本当は救いきれない、そこは政治家の皆さんとか学者は意外とわからないのですよ、合理的に理解できないと論文にできないので。けれども、日本の文化というのはそういうものなので、宗教学法で切るといっても問題です。

【市川】 進士先生は公園法、公園の中を維持管理していかなくてはいけないので施設をつくるのが可能になるという法律を、「あれは僕も50%ほど責任がある」とお話しくださったので、ぜひその辺のことも教えていただきたいと思います。

【進士先生】 今の説明は不確かです。先ほどの小松宮の銅像があるのは上野公園です。上野公園はどこにあるかということ、美術館、科学博物館、国立博物館などいっぱいあって、その間の木が植わっているところだけが公園みたいになっていく。それはなぜかということ、仁和寺と同じことです。寛永寺の境内は一般の人に利用させるということで、明治6年に公園という名前にしたのです。けれども、それまでに既に国立博物館のところは文部省の所管にするとか、次々にやっていったわけです。だから、公園だってほとんどない。

これはまずいというので昭和31年に都市公園法という法律をつくり、公園というのは未来永劫オープンスペースで、建物を建てない場所だということになった。ただ、それでも公園に行けばトイレがあったり、シャワールームがあったり、売店があったり、いろいろしなきゃいけない。それは建べい率で認めているのです。しかし、日本中全体からいうと、海外に比べるとオープンスペースは足りない。ですから、そういう制限を加えました。

ところが現実には、地方では人口が減って、一人当たりの公園面積が海外並みになってきたわけです。そういうことと財政上の問題、公園は結構維持管理が要る。植物や動物がいれば、動物は餌を食べるし、その予算が今、日本中ほとんど減っている。港湾とか道路はインフラで非常に大事だが、公園は未だだというのが明治政府以来の日本の財政関係者の理解だった。維持管理ができない、どうするか、仁和寺さんと同じで自助努力でやらなければいけないということになってきた。

そうなる今までの法律のままではできない、それで指定

管理者制度とかいろいろない方をして、もう少し自由にやれるようにする。ただ、それは仁和寺さんと同じで歴史をきちんと大事にして、その範囲でやっているわけです。新しい時代の公園のありようという検討会を国土交通省の公園でやって、私はその座長をやったのですが、そういう範囲でやる。当然市民参加ですから、この名古屋市の公園は名古屋市の所管。

名古屋市の 鶴舞公園の魅力

【市川】 ではこの辺で、鶴舞公園の絵をお願いします。

鶴舞公園は名古屋市の市民公園で、出来てから112年にな



ります。日露戦争に勝利した日本が4年後にこの鶴舞公園をつくりました。ですから、いろいろな部分に和洋折衷、これからは西洋とも肩を並べる日本であるべきだという気概が大変あります。噴水塔の石組みは日本庭園のようになっております。ここで私は子供の頃水遊びをして怒られました。

これがヒマラヤスギ、正面に鶴舞公園がありまして、こちらにはペーパードルフィンがあり、名古屋市民だったら、ここで遊んだ記憶のある方も多いのではないかと思います。

まっすぐ行くと噴水があって、噴水の向こうに音楽堂がございます。これは普選壇、今は若い人のコンサートをやったりしていますけれども、お年寄りの人はここで将棋をさしたりしています。柳がありまして、この音楽堂は階段の手すりに音符がついている、君が代の楽曲が音符になっていて、そして手すりのところが青海波（セイガイハ）になっています。なおかつ、柱のレリーフの上に桜の紋がついている、西洋と日本が和洋折衷になっています。

その当時つくった方々の勢いというか、日本も西洋と肩を並べ、またもって日本を主張していくという気概、西洋化したいろいろなものが入ってきて、それをコピーはしていくのですが、魂は日本という思い、そんな気概があるように思います。



こちらは蓮池です。とにかく入り口からまっすぐ歩いていくと、西洋と東洋が合体したようなところから、西洋世界観があり、日本庭園があり、そしてその奥が山水画のようなところになっている。熊沢山がちょうどその日本庭園のところにあります。

ここは孤独になれる場所です。公園はみんなで楽しむ場所ですけれども、ここは一体だけは、昔は「山乃茶屋」がありました。朝早く行くとフルートの練習とか、いろいろな演奏家がいらっしゃっています。とても孤独になれる神域、神様が見ていらっしゃるのではないかと一瞬感じられる。神社でもお寺でもないけれども、自然から何か啓示を受けるような感覚をいただける場所です。

これがちょうど鶴舞公園の真ん中にあるというのが、私は日本の大事にしているものがこの公園のおへそにあるような気がして、今は水もかたまってしまっていますが、前はホテルが飛んでいました。今、井戸を掘られているということも先ほど伺いました。何か112年前の人たちの思いが、ここ名古屋の公園にあらわれているような気がして、大事な歴史公園といえます。公園のほぼ全域が国の登録記念物（八幡山古墳は国の指定史跡）に指定されております。

（トーク）

【市川】 先ほど進士先生と、公園の中を一緒に歩いていただいたのですが、初めての鶴舞公園はいかがですか。

【進士】 歴史の継承で言うと、鶴舞公園は間違いなく立派な歴史的空間だと思います。公園にはいろいろあって、オリンピックでやっているような新しい運動公園は、半分以上運動的な施設で埋められている。こういう公園は昔から総合公園といいますが、いろいろな機能を複合してつくったのです。日比谷公園が最初で、その次にこちらもできたと思う。

いずれにしても、両方とも公園の形というものが決まっていない時代の産物なのです。

僕の考えでは、日本の公園の本質は鎮守の森とかお寺の境内だったのです。だから、私は社叢学会というものをつくったのです。森は、自然の非常に強い森からやさしい森へ、つまり3本の「森」から2本の「林」になって1本の「木」になる、1本ずつ抜いていくと明くるでだんだんモダンになる、深くなる、精神性から利用ということまでいく、いずれにしても幅広い。

しかし、神社とかお寺の境内は人為的にちゃんとコントロールされていて、先ほどの家畜的な空間です。非常に使い勝手よく、緑いっぱいさわやかで、涼しい風も通る、この

ように造園家はやってきた。日比谷公園もそういうものを目指してつくったわけです。国威発揚のこともあって、日清日露はこういう公園にいろいろの影響を与え、いろいろな施設ができていく、これは全部政治の舞台なのです。日比谷も焼き討ち事件とかメーデー事件とかいっぱいありました。

そういう流れでできたので、デザインどおりとか、公園のプランをきちんと客観的につくっているというだけではないのです。私は、それを今になって変なものを捨ててすっきりしろとは言わない。つまり100年を超えているものは「百年公園」といって、歴史そのものに価値がある。一見ちぐはぐだったり、何でここにこんなものがと不似合いだと思っても、時間がそれをつくったのです。

「歴史的公園」という概念を僕はつくりました。ふつうの歴史公園というのは、古墳とか、名古屋城は名城の歴史があるからそれを公園にした。僕の言っているのは公園そのものが歴史だと、それを「歴史的公園」、これはそれに属します。

【市川】 戦争が云々ということよりも、今112年たつて平和であることの尊さとか、これを見てそのときの人たちの、切り口が間違ったかもしれないけれども、気持ちとしては日本への思い、日本人が大事にしてきたものを世界観として、西洋世界観だけでなく、日本の世界観というものをきちんとここにあらわしている。

【進士】 まちの公園はこういいうのでいい、否定してはいない。ただ現実には歩いてみると、相当傷んでいたり、でこぼこしたり、崩れかかったり、それから水は汚いし、泥だらけだし、まずそこを掃除したり、手入れするほうが先だね。それは公園の必須要件です。公園は衛生という概念が基本だったから。日本の都市公園は、都市は衛生的でないのです、衛生的な環境が要するという公衆衛生からきている。

何よりも100年が価値だと言っているわけです。それは



なぜかという、まちはどんどん変化している、今の東京など、超高層だらけで変化しすぎている。こんな無機的な空間で、ビルには結構おしゃべりなカフェをつけたり、噴水をやってたりしています。ただ、とってつけたような、目の前だけのちよっとした空間だから都市としてのまとまりになっていない。

名古屋はこのくらいのスケールの緑地が本当はもう3つぐらいないと足りないと思います。それがネットワークされてパークシステムをつくったり、それぞれの個性を生かしたりする。まずこれはリフレッシュメントをやるだけで随分よく

なりますよ。それから、植栽なども傷んでいるものは新しく補植することもできるし、そういうデザインをきちんとすることがまず入り口だと思います。

この公園が市川さんの原風景なのです。子どものころに水遊びして怒られた、それが公園というものの原体験なのです。だから大事だと思ってるわけ、僕はそれが一番いいと言っている。

【市川】 環境を大事にしようというお話は、まず自分の環境を大事にしないとできないと思うのです。私は名古屋市民でこの近くに住んでいます。ですから、この環境をいかにもっと愛しているか、そんな思いでいます。山に行くと新鮮な空気を吸って何かしら新たな思いを持って帰ってくるように、鶴舞公園の熊沢山へ行って、新城の鳳来寺山に登ったような気持ちになって帰ってくれば、新城へは2時間かかるけれども、まちの中だから30分。鶴舞だけではありません、皆さんの環境の中でそういうところを探して、自分の日々の活性させるものが、神社もお寺も公園も含めてあることが大事だと、自分の環境は自分で守る。

【進士】 そういうお気持ちは大事だけれども、一応僕みたいプランナーであり、デザイナーの目で見ると、鳳来寺山に行ったほうがやっぱりいいよ。(笑)

だから、鳳来寺山の「新新新新」くらいで(笑)、こういうのを「見立て」というのですけれども、向こうのそれを見立てて熊沢山をそうしたいというのはいいと思うが、本物はやっぱり大事です。

【市川】 もちろんそうです。山の「見立て」を大事にする気持ちがあれば、本当の山に対しての思いはもっと深くなりますね。だから、まちの中にもそういう場所があって、やっぱり自然、山は大事だなどと思う人たちが増えればいいのではないかと。

【進士】 昔のまちはそうできていたのです。江戸っ子たちは、まちの中に富士山をつくったわけ、それは「江戸富士」と呼んでいますけれども、実際の場所は江戸富士用の土地はないので、もともとの鎮守の森を使って、その一角に「富士塚」というのを、わざわざ溶岩をみんなで運んでつくっているわけです。

ですから、富士山を遠くから拝んでいて、本当は行きたいけれども行く金もない。だから「富士講」という講をつくって、10年に1回でも無理だから一生に1回でもいいやと我慢して、そういう生き方をしたわけです。でも、庭は一応「見立て」をやって、今度は心の中で見るのです。日本の庭園というのは、半分以上はイメージでできています、イマジネーションが大事。

【市川】 仁和寺さんも裏山に四国八十八カ所巡りをやられていますよね。

【金崎】 あります。ほぼ先生と同じ理屈です。京都の人は四国へなかなか行けないので、当時の人が勅命を出して四国の土を集めて、10万坪ぐらいの中に88個のお堂を建てて、今もまだキープしています。

【進士】 現代風に言うと、ある種の集客施設です。

【市川】 でも、そこに精神がつかっているからふつうのイベント会場ではないですね。

【進士】 ユニバーサル・スタジオ・ジャパンはそういう意味でだめだね。やっぱり勧請(カンジョウ)しているわけです。今のその土を持ってくるかは別として、そのある種のスピリチュアルなものをいってきても、勧請してやっているというところが日本的です。

【市川】 それがまた「見立て」の中にちゃんと映されているというので、とてもいい会話になったような気がします。(笑)

参加の皆様からの一言

【市川】 最後に、参加された皆様から、一言ずつ伺いさせていただきます。

【金崎】 今回はお呼びいただきありがとうございました。

こういうお寺で、どちらかというとデベロッパのような仕事をやっているイメージですけども、先生も先ほど言っていたように、続いているというところに一番の価値がある。その価値が日本人の風土とか考え方によって評価されているからこそ、古く残っているものを大切に思うということではないかと思えます。

その最たるところにお寺とか神社が、すべてとは言いませんけれども、何割かの要因は持っているのではないかと思えます。だからこそ、新しいものを取り入れながら、新しいものは古いものをリスペクトして、光と影のように両方のバランス、下に掘れば掘るほどやっぱり上に伸びられると思っておりますので、そういう中で未来の人につながるにはいいのではないかと思えます。

やはり未来を目指すのであれば、いいことばかりではなくて過去にあった悪いこともいっばい見ているが、悪いことはしつべ返して返ってきますので反省もしながら、結果的にはキープする。では、何のためにキープするかと言えば、仏教も日本民族の風土に合った考え方の中の一つではないかと思ひまして、頑張っている次第です。京都に来られたときは、ぜひ足をお運びください。

今、永平寺さんも周辺の木の年輪を調べて、どこの木を植えたとか、福井は結構頑張っていると聞いています。僕の後輩とか知り合いの子も福井の県庁に入って頑張っています。楽しいところだと思っているので、ぜひ機会があれば行ってください。

きょうはどうもありがとうございました。

【湯浅】 私は、新城の市街地より少し入ったところに住んでおります。近くにいわゆる公園というものはないけれども、私の住んでいる地域は天竜奥三河国定公園という国で定められた大きな公園の中に入っています。50年近く今の場所に住んでいますけれども、私の家のすぐ裏に宇連川が流れておりまして、夏は、私が子どものころは人もほとんど来ず、そこで友だちと水遊びをして、本当に天然の公園だった。秋になれば、山の中へ入って山栗を拾ったりして遊んでいました。

それが今から十数年前、家の裏の川に面しているところが公園になりました。護岸が整備されて水遊びをしましようにという場所になりました。そうしたら、夏はうるさくて寝ら

れなくなりました。パーベキューをして、夜そこで騒いで花火をあげてということが頻発して、お盆の時期は全く寝られないぐらいうるさいという形になった。

それで近年、市のほうも動いてくれて、夜間は駐車場を閉めることになったので、ようやく夜は寝られるようになったのですが、昼間は今まで続いておられます。整備したことによって、地域に住んでいる人たちが非常に困るという状況が一方であるのです。

ただ、朝夕は川を散歩していますし、それから今ぐらいの時期はもうお客さんも来ませんので、土日になると川へ行って足を水にひたしたりするのが、私たちの生活の一部みたいな格好に今なっております。ですので、近くに公園はなくても、私たちが住んでいる地域全体が公園なのだという感じで、日々過ごしております。

鳳来寺山もこれから秋になると紅葉がすごくよくなってまいります。鳳来寺などはお客さんを受け入れるための整備がしっかりとされていますから、やはりどんどん来ていただきたい。ふだんは市内の近くの公園で過ごしていただけて、ちょっと時間があるときに新城のほうへお越しただけると、また新城以外にも奥三河という、愛知県に広い公園のような場所がいっぱいありますので、ぜひ足を伸ばしていただけたらいいなと思っております。

もしわからないことがあれば、私は設楽原歴史資料館におりますので、お声かけいただければ皆さんのお手伝いができるかと思ひます。

本日はどうもありがとうございました。

【進士】 新城は全部公園なのです。だから、贅沢なところにおられるということなんです。ただ、経済的な格差があるので、多分自治体は観光的な施設をつくって人を集めようとするわけなんです。緑の話とお金の話がクロスしてややくしくなって、地元からいうと観光公害ということになっている。それ全体をちゃんとバランスよくやるのが実は「まちづくり」というもので、そのところの話をまた別にしないといけない。私はそういう贅沢なところにいるというすばらしさこそ自覚すべきだと思ひます。

逆に市川さんは、非常に厳しい環境になっちゃっているのですね。怒っておられる。ただ、歴史がそれをつくっている、公園のすばらしさはこの樹木の年輪なのです。それを私は「エージングの美」と言っています。時間がたつことの美です。人間もエージングの美があると思ひますが、生き物は必ず時を刻んで年をとる、これを私は「美」だと思ひますが、木はその典型なのです。

若木と老木の違いは、老木はオーラを発信していて美しい、本当に安心できるすこいものです。だから京都にみんなが来るわけなんです、土地全体がそうになっている。その森から林、木になっても、やっぱり時間の美はすこいものです。野菜でも100年のダイコンなんかない、自然の中で時間を象徴するのは木だけなのです。

それが、経済活動が盛んな名古屋のような中核都市では減っていくわけです。変化する中に、変化しない本当の時間の座標軸があるということの価値はすばらしいものです。た

だ、汚いところ、崩れているところ、危ないところ、水が汚れているところはまずきれいにしなきゃいけない。そうなるとおのずと人が来るようになるし、きちんとしたマナーで使うようになってきます。

だから、時間の中で変化するものとしらないものがあるって、変化しないものの中に重要な緑とオープンスペースがある。そしてそれは新城から京都まで、永平寺も言ってくださったが、私は永平寺町の門前を全部監修しているのです。町が参道を百何十年前の石畳につけて来て、三面張りのコンクリート河川だった永平寺川を全部自然河川に戻し、仏の声だという道元の教えをそのままやろうと思ひて水の音も聞こえるようにしました。

どこの都市にも、どこの地域にもいろいろな問題がある、それは現実です。その現実をどのくらい理想に近づけるかというの、皆さんが深い思いを持って、だから市川さんがやさしい桜をこどもでもやるといってもいいかもしれません。僕はソメイヨシノだけが桜というのはやっぱり問題だと思ひている。私は、「大人の勉強会」というのが一番気に入ったのです。それでさっきからいろいろ言うことを言いました。大体今、本音の議論がなくて建前ばかり言うのです。そうじゃなくて、本音で議論するのが「大人の勉強会」だと思ひます。だから、私は市川さんのこのやる気はすばらしいと思ひます。

【市川】 皆さま、本日はどうもありがとうございました。



おわりに

明治以来、私たちは、何をしてきたのでしょうか。「近代的」と「ヨーロッパ的」に憧れてきました。しかし、日本的なものを嫌ったわけではないのです。これからの私たちは、この国をもっと知る楽しみがあります。これまで埃を被った身近な場所から発見することは多いでしょう。まずは、私たちの大切な思い出の場所に行き、過去を思い返してみてもうどうでしょうか。進士先生が、以前一流であることを話されましたが、一流とは、人の行い、考えに曇りない人であることを一流と言います。その精神は魅力的な芸術を見るようなものです。

最後に、再度「鶴舞公園の魅力」は、西洋世界が押し迫る時に、内にこもる実感があの和洋折衷となっています。とってつけたものではなく、心からの時代の意識が形になっていると思うのです。それを次の時代、時代に受け継いできました。一流かどうか、本気力であるかどうか、もしかして過去は今に対してそれをただしているように思うのです。(市川)。

主催：日本の伝統文化をつなぐ実行委員会

後援：愛知県・名古屋市



Homepage
<https://dentoubunka2021.com>



YouTube
https://youtu.be/Xd5nluF0p_M

日本の伝統文化をつなぐ実行委員会
〒460-0012 名古屋市中区千代田 3-10-3
電話 052-323-4499
FAX 052-323-4575
メール d.tsunagu@gmail.com